

は同じだけ苦しんだ者、同じだけ耐えた人によってさせるべきである。…」

「暴力はすべての党派にある。そして他の手段に信頼を失い、絶望している。…」

「…あらゆる党派の中で、現在私は唯一の党—アナキスト—をみているが、これは人間の生を尊重し、死刑の廃止、人間による人間の、刑務所での苦しみと処罰の廃止を声高く主唱している。他の党は、日常で人間の生を尊敬しないでいいと教えているのだ。敵は殺せ、刑務所で死ぬまで敵を苦しめよ、これがその教義である。株券保持者の利益のため、彼等は鉱山で鉱夫を殺し、列車の中で乗客を殺し、アレキサンドリアで爆弾騒ぎを起し、街路で女子供を殺している。彼等は教義の成果を収獲しているに過ぎない。人間の生の神聖はどうだろう。あらゆる手段を尽すべきである。しかし社会がまず、人間の生の神聖さを認めるべきで、その反対を教えてはならない。…」

*和田久太郎、古田大次郎の事件を知悉していた中国の作家・アナキスト巴金（バーチン）は、一九二〇年代のエマに手紙を送り、ベルクマンとフランスで面識もあった人だが、この主題について発言している。彼はまずテロの意味を二つに分ける。一八七〇年〜八〇年代のロシアのテロは「生命には生命を」である。それは自衛であった。これに対し古田大次郎は「愛のために殺す」である。ロプシンの「蒼ざめた馬」では何故殺すかと訊ねられ「わたしは愛のために生きる力がない。けれど愛のために死ぬことができ、死なねばならぬと知っている」とある。

「…彼等は歓んで酷い困難にむかい、自分の生命と幸福を、未来の人間にとって愛のある世界を創出するために捧げるのだ。彼等の爆弾が役に立たなかったとしても…その立派な個性を認めず、血と涙で作られた情緒は最も美しいと認められないのだろうか？ これらの優れた人びとはその活力を建設的仕事に活用できず、感じやすい年令で死刑台に登らな

ければならなかった。テロリストの多くは廿才代であった。われわれは、さような状態を許す社会は、変革すべきだと言えないだろうか？」

「…テロリズムは社会の犯罪によって、作られる。現在の社会が存続する限り、大衆は苦しみ、少数者がよい生活を楽しむ限り、テロリズムは避けられないのだ。…私はテロに反対だ。しかしテロリストには大きな敬意をもっている。私はテロ活動を擁護し宣伝するのは反対である。またテロをアナキズムと同一視し、アナキズムの実現方法とするのは反対である。アナキズムの実現は、組織された大衆運動によってのみ達成される。テロ行為はアナキズムに大きな利益にならない。それ故、私はテロリストが革命的仕事にその活力を用いるよう希望する。みなが大衆運動と一緒に働かなければならない。これこそ勝利をもたらす本当の仕事なのだ。…」

巴金の発言は一九二〇年代の中国で未だマルキストの勢力が弱く、国民党による暗殺が行っていた際のものである。

幸徳事件

〔エマはその主宰する「大地」誌において、日本で幸徳伝次郎（秋水）の大逆事件が起

きた際、積極的な支援運動を展開した。一九一〇年十二月―一九一一年一月迄の各号に幸徳の人柄、処刑された同志達の様子、日本の社会状態の記述を交じえ、A・ベルクマン、サダキチ・ハルトマン、ヒツポリートハウエル、ヨネ・ノグチの意見、堺利彦、石川三四郎らのカンパ要請の手紙、支援感謝の手紙を加え、幸徳―ジョンソンの往復書簡でしめくくっている。ここでは支援運動を始めた時のエマの考えを彼女の伝記から抜粋し、またその間で、この運動に積極的でなかったアナキスト同志宛への彼女の弁明をあげる」

日本からミカドの生命をねらったと言う計画によって、数多くのアナキスト逮捕のニュースがとどきました。そのグループの知名人はデンジロウ・コウトクでした。彼は自国では、日本をバラ色に描いた西欧の作家達、ラフカディオ・ハーン、ピエル・ロッティ、マダム・ゴーチエよりも有名でした。コウトクは自分で、労働者が使役される野蛮な政治体制の下で、その悲惨な状況を経験したので、長年、彼はこの状況に対処するよう日本のインテリゲンチアと大衆の眼覚めのために自己を捧げていました。彼は明敏な心の人で、有能な作家、またカール・マルクス、レオ・トルストイ、ピーター・クロボトキンの著作の翻訳者でした。リエン・スー・ソー、ホーチン夫人と協力して、彼はトウキョウ大学で日本人、中国人学生の間にアナキズムを宣伝しました。政府は繰返し彼をその活動の故に投獄しましたが、わが同志の情熱をそぐことはできません。最後に当局は、天皇に対する計画の中に彼を巻きこみ「除去」しようと決めたのです。

一月一〇日(一九一〇年)A・P通信は「ミカドの生命に対する計画者達を吟味する特別法廷を任命し、二六名が有罪とされ、その中に首謀者コウトクと彼の妻スガノ・カンノが含まれている。同法

廷は七三条による厳罰を勧告し、これによれば、皇族に対する反逆罪は死刑を規定している」と報道しました。

日本での執行者の手をとどめるのに何かをしなければならぬとすれば一刻の猶予もありませんでした。私は言論自由連盟の会長、D・アボットの手を借り、反対を提起し、これが間もなく全国的規模になったのです。送られてきた手紙、電報類をワシントン在の日本大使、ニューヨークの領事、米国の諸新聞に廻送しました。公的生活で知名な人びとの委員会が、米国における日本代表達と会見しました。米国の大きな反対は、ミカドの総督共の気に入らないのは明瞭でした。彼等は有罪者達の性格を黒く塗りつぶそうとやっきになり、われわれの委員会が尽力をやめるよう懸命の努力をしていました。これに答えて私達の仕事は、私的な、また公的な会合をもち、新聞社を攻撃し、他方では日本で行なわれている合法的犯罪に喚起するよう熱心に努めたのです。

このキャンペーンに参加した多くの友人の中にサダキチ・ハルトマンがいました。彼は詩人、作家、画家でまたホイットマンとポーの詩や物語を数多く読んでいました。私が彼に初めて逢ったのは一八九四年です。以後の彼はわれわれの雑誌(大地)のきまった寄稿者になっていました。日本人の混血である彼は日本の状態とコウトク事件に親しく、私達の要請によって強力な宣言文起草し、これを有罪になった同志達の為に広く配布したのです。」

「デトロイトで(エマの遊説先―訳註)日本の同志達の処刑のいやなニュースを受け取りました。デンジロウ・コウトクと彼の妻スガノ・カンノ、米国で教育を受けた医師、S・オオイシ博士、農業技師、A・モリチキ(森近運平の事か―訳註)とその協力者達が合法的に暗殺されたのです。彼等の犯

罪は、わがシカゴの犠牲者達（ヘイマーケット事件）と同じく、同胞を愛し、理想に貢献したことでした。

「アナーキ万才！」「デンジロウ・コウトクは最後の息と共に叫びました。」

「バンザイ（永遠に）」と彼の仲間達が死において唱和しました。「わたしは自由のために生き、自由のために死ぬのです。何故なら自由がわたしの生命でした。」スガノ・カンノは叫びました。東洋と西洋が、血の同じきずに結ばれたのです。」

中 中 中

親愛なホール様

あなたのお手紙は「大地」誌三月号に発表できませんでした。わたしも非常に忙しく、三日付のあなたのお手紙のご返事が遅延致しました。

わたしはあなたのお手紙の内容に驚いたと申し上げても決して言い過ぎではありません。わたしはわたしを一〇年以上も知っていて下さるあなたやすべての仲間の人びと、またわたしと同じ考えの他の多くの人びとに期待していました。あなたはアナーキストを思想的なものとテロリストに二分割する考えを發展させておられますね。だがわたしはあなたが非常に多くの人びとの間で一般的である迷信のくびきかけられているのだと理解します。

ところで明白なのは、誰もが同意している——タッカー氏のような極左の尊敬すべき人でもそうですが——のは抑圧に抵抗する権利がある以外、暴力を宣伝するアナーキストは世界で一人もないことです。フレッドシュルターが適切に言った「思想的アナキスト」の用語は、馬鹿だと思われたくないが、さりとて社会の現状に反抗するのだ、と認める勇氣は持ちあわせていない多くの人びとのための衣裳

に過ぎないのです。この用語は米国外の他の国では使用されていませんし、またシュルターが引用したという理由だけで広く採用されているのです。アナーキスト、個人主義者、コミュニストがいるのは事実ですが、これらの用語はアナーキズムの下で特別な経済的調整の差異を示しているだけなのです。ですが彼等を思想的とテロリストのアナーキストに分類するのは、思うに、非常に不合理です。あなたはその観念が一般だというだけでような分類を受け入れはしないでしよう。あなたは物件税の一般の観念が、人から土地を奪うというだけで、この意味を受け入れますか？ 自由人としてのあなたはあなたの依って立つものに興味をもつべきです。勿論、その間違いの概念について、公衆に説得すべきです。けれどあなたは世論を満足させるというだけで自分に別の名称がつけられますか？ 思うに「アナーキスト」の名は全く広大で、個人の自由と集約的な機会に、基礎を置いた社会について、わたし達が抱く観念には何によらず冠せられるのです。もし大衆がそれを理解しないなら、それを教育するのがわたしの仕事ですが、大衆が無知だからとの理由で自分に別の名を冠するのは、わたしの仕事ではありません。

さて何故アナーキストが日本での恐ろしい殺人に対する積極的な抗議に参加したか説明しましょう。最近殺された日本人達は別に特別な資格を付すことなくアナーキストだと公表していました。事実、彼等は「クロボトキン主義者」として知られていましたが、それはクロボトキンの著作を訳したからでした。彼等は、以前も、また未だにマルクス流の社会主義者達によって厳しく攻撃されていますが、それはこの国（米国）において、わたし達が攻撃されているのと同じです。もし彼等の唯一の同志であるアナーキスト達が、彼等のために活動的な役割を果さなかったら、日本の犠牲者達にとって、確かに落胆的な裏切りになるでしょう。彼等が日本で全く孤立しているのは事実なので、ここや

ヨーロッパでわたし達が出来る限り声を大にして、彼等に同情を表明すべきなのは当然なのです。少なくとも全世界の同志達が、彼等と共にいることを知るのは何らかの勇気づけになったに違いありません。

勿論、わたしは未だ生き永らえ日本当局の手に落ちている人びとを傷つけるとなれば残念です。しかしわたしは彼等を否定することで彼等が救えるから、ただ沈黙を守ることを彼等が望むとは決して思えないのです。わたしが彼等の立場と入れ替っていたら、わたしのアナキズムを否定するという条件でのみ所謂「リベラル」な人びとの同情と援助が与えられるのでしたら、わたしはそれを全く拒否します。

あなたがお望みならこの抗議に名前を貸さなくて結構です。決定はあなたがなさって下さい。けれど自分でリベラルだとかラジカルだと宣言しながら、相手がアナキストだから、またはアナキストが抗議において彼等の兄弟と手を組んでいるから、名前をひっこめるといふ他の多くの人びととあなたが同じだとは信じられません。もしリベリズムに何らかの意味があるなら、それは自由の理想を信仰するという意味で、特に自由の理想を享有する個人の権利においてあるべきで、それは公衆が一般にどう理解しようとする関係のないことです。いずれにせよ、われわれが自由の道程で過去に何を達成したにせよ、それは自己の信条に基づいた理念の先駆者達の強固で忠実な執着のお蔭なのです。

わたしと同様ホール氏もご存知の筈ですがわたしは、あなたがわたし達に原理を裏切るとか、また保守的要素で達成した何らかのつまらぬ利得で、同志を裏切るのを期待されようとは思いません。

かような言い方は少々手きびしいかもしれません。けれどわたしは特にあなたにだけそうするのはなく、真実を語ったまでなのです。この国でのすべての男女の基本的な努力は、妥協にあるように

すが、わたしはそれが嫌いです。わたしは自分にさような手段で、認められるものを手に入れるのは拒否しますし、わたしの同志とわたしが呼んでいる人びとをさような手段で購うのも拒否します。もし日本にいる人びとが彼等の理念を否定すれば、わたしは非常に悲しんだに違いありませんが、だからと言って彼等を非難は致しません。何故ならその時彼等は自分の熱望に反して言ったのでしょうか。けれど彼等が真理のために立上る程充分勇気がある間、わたしやここにいるわたしの同志達が彼等に反対する一般の吠え声に、何故唱和しなければならぬ理由があるのでしょうか？

エマ・ゴールドマン

一九一一年二月一日

サーシャの出獄

わたしはすべてを自由に、大地に誌に捧げられるようになった。でももっと大事で、一四年間わたしが待ち焦がれていた事件が近づいていたのです。それはサーシャの出獄でした。

一九〇六年五月がやっと訪れた。サーシャの復活まで二週間を残すだけになったのです。わたしは落着かず、色々な想いに悩まされました。サーシャにどんな顔をして逢えるだろうか。わたし達の間

は、見張役もいず手を取りあえるのだろうか。一四年は長い時間です。わたし達の生活はそれぞれ違った道を歩いてきたのです。わたし達が別れた時、わたし達のものであった生活と同志愛がもとに戻らない程、お互いに離れていたとしたらどうでしょう？ さような可能性を思うと、怖れて苦しみました。わたしはそれでも自分の心に言いかけたのです。へ大地へ 誌がある。短い講演旅行を調整したり、講義の準備に追われていました。サーシヤが刑務所からでて、自由へ踏み出す門の所で、最初に逢おうとプランをたてたけれど、彼の手紙はデトロイトを指定してきました。わたしと一緒にいる所を刑事や記者や好奇心に溢れた群集にみられるのは厭だと書いてきたのです。わたしがプランをたてたより待ち時間が長びくのは酷い失望でしたが、彼の言うのも、もつともでした……

バッファロー、トレント、モントリオールの集会、群集の中をわたしは夢みるように過し、只一つの想い―五月一八日―サーシヤの出獄日を想っていました。わたしはデトロイトに着いたのはその日の早朝で、サーシヤが出獄を前にして、いらいらしながら独房の中を歩いている様子を想い描いていました。カール（エマの同志でデトロイトに住み、サーシヤを宿泊させる予定になっていた―訳註）が駅でわたしに逢って呉れた。彼はサーシヤの歓迎会を手筈していると言った。わたしは時計がわたしの人を解放する時報を打たないかと耳をすましていたのです。昼になって、ピッツバーグの友人達が電報を寄した。へ自由になってデトロイトへ向う―カールは電報を握って、夢中で手を振り叫びました。

「自由になったぞ！ 自由だぞ！」

わたしは同じように喜べなかった。疑惑にさいなまされた。夕方になって、わたしの眼でサーシヤを見ることができたら、その疑いも晴れるでしょう。

わたしは駅で立ちつくし、ポストにもたれかかっていた。カールと友達が近くにいて話しこんでいる。その声はどこか遠くから聞えるようで、あの人達の身体がぼやけ、うるんでいるのでした。わたしの想念の深みから、突然、過去が浮びあがった。一八九二年七月一〇日、わたしはバルチモアにいて、それからニューヨークのオハイオ駅にいます。そして動く列車のステップに立ち、サーシヤに抱きついていたのでした。列車が速力を早め、わたしが飛び降りて、後を追いかける。手を差上げて夢中で呼びかける。へサーシヤ、サーシヤ！

誰かがわたしの袖を引く。呼びかけるのです。「エマ、エマ、列車が入ってきたぞ。急ぐんだ―門の所だよ！」カールと彼の娘が先に走り、わたしも走ろうとしたのだが、足が動かない。大地に釘づけられたように動けず、ポストにかじりつき、胸は高鳴るのです。

友人達が戻って来て、その中に見知らぬ男が軽ろやかに歩いてきました。

「サーシヤだよ」カールが叫んだ。

その見知らぬ顔付きの男が、サーシヤかどうか訝しかった。顔は蒼白で、大きなぶかっような眼鏡をかけ、帽子は大きすぎて目深に被り、何んともなく悲しそうでわびしかった。わたしは彼がわたしをじつとみつめ、手を差出すのを認めました。恐怖と哀れさに襲われ、彼を自分の胸に抱きとめた衝動に駆られました。わたしは持参したバラを彼の手に渡すと抱きつき、彼の唇に強く触れました。頭の中では愛の言葉や熱望が燃えながら、無言でした。わたし達は腕を組み、黙って歩いたのです。

レストランへ着いて、カールが食べ物と酒を注文した。わたし達はサーシヤのために乾杯しました。彼は帽子を被ったまま、黙って坐り、彼の眼の中には何かにつきまとわれるようなかけりがあつた。一、二度微笑したけど、それは苦しそうな歎きのない苦笑いでした。彼の帽子をとってやりました。

彼は困った様子で身じろぎして、あたりをひそかに窺い、また静かに帽子を被るのでした。頭は剃られていたのです！わたしの眼に涙がふくれあがった。奴等は残酷な年月の上に最後の侮辱を加えたのです。頭を剃って、酷い衣服を着けさせ、外界とのへだたりを鮮明にさせ、彼に思い知らせたのです。よう。わたしは涙を押しとどめ、楽しい様子をつくらうい、彼の透き通る青白い手を押えました。

ようやく、サーシャとわたしは、カールの家の別の部屋で二人きりになった。わたし達は闇に取残された子供のようにお互いに顔を見合わせた。手を重ね、間近に坐って、わたしといえ、心に溢れることは言い出せないで、重要なことばかり喋舌るのです。疲れきつたわたしはようやく身体をベットに運びました。サーシャは長椅子にちこまった恰好で横になっていました。部屋は暗く、時々サーシャの煙草の火が闇の中に光るのです。わたしは固くなり寒気を覚えた。それからサーシャが部屋を捜し求め、近づいてきて震える手でわたしに触れた。

わたし達は一緒に横臥していました。でも想いは別々で、夜の静けさの中に胸の鼓動が聞えました。彼は何か言おうとするのだけど、自制して深い溜息をつき、とうとうこらえきれなくなって激しく鳴咽した。彼をひとりしておくのが、根こそぎおのかせる彼の心の風を鎮めることになろうかと思案しました。やがて落着くと散歩にでたいと言う。部屋の壁が自分を押しつぶすようだと言う。わたしは彼がドアを締める音を聞き、ひとり悲しみに沈んだ。でもサーシャが自由になるための闘争は、ここで始まったばかりなのだと思得したのです。

わたしは眼覚めて、サーシャが何処か静かな所へ、ひとりで行く必要があると思いました。でも集会と歓迎会が、デトロイト、シカゴ、ミルウォーキー、ニューヨークと予定されて居、同志達は彼に逢いたがり、再会を望む人もいます。特に若い人達は、襲撃のため、一四年も生きながら埋もれた男

をみると喝采するのです。心配でしたが、予定表が終らなければ、遁げだせないと思った。それから小さな農場へでも行って、ゆっくり自分の人生をみつければよろしい。

デトロイトの新聞は、カールを訪ねたわたし達の記事で一杯で、あの街を去る前に、わたしがA・ペルクマンと結婚して、ハネムーンに出たとのことでした。シカゴでは通信員に絶えず尾行され、集会は警官の重囲の中で行われた。ニューヨークのグランド・セントラル・パレスの歓迎会は、規模が大きく、聴衆の熱狂が凄じかった。サーシャはどこよりも憂鬱そうでした。でもようやくそうした不幸も終りになり、オシニングの小さい農場へでかけた。サーシャはそれが気に入った。荒野や孤独や静けさが好きなのです。わたしは新しい希望が湧きました。彼を刑務所の影から救出できるのです。

長い年月飢えていたので、彼はがつがつ食べました。その食べる量も異常で、長らく取りあげられていた彼の好きなユダヤ料理は特にそうでした。十二枚ものプリンツ（イーデッシ風のパンケーキでチーズか肉の入ったもの）とか大きなアップルパイを平らげるのは何んでもない様子。わたしは料理をしたり、パンを焼いたり彼の食物の楽しみにあい幸福でした。多くの友人がわたしの料理法に敬意を払って呉れますが、飢えたサーシャ程、的確な指摘をして呉れた人は他にいません。

わたし達の牧歌風な暮らしは短命だった。過去の黒い幽霊が再び犠牲者を追いまわし、彼は家からでて平静を奪われました。サーシャは森をさまよい、何時間も地面に横になり、黙ったまま落着かない。田舎の静けさが彼の内面の動揺を高めました。それに耐えられないから、街へ帰ると言うのです。心を占める仕事をみつけないければ、気狂いになりそう。生活をしなければならぬのであって、公衆の資金で支えられる訳にはいかない。彼は同志達が寄せて呉れた五〇〇ドルを受けとるのは厭やが

り、その金を幾つかのアナキストの出版物に分配してしまったのです。彼を苦しめる別な事柄があった。それは長年を共にした刑務所での不幸な同志達のことだった。あの人達が平和と快適さを奪われているのに、自分が享受しているのか？ 彼等の運動を声援し、刑務所内の恐怖に反対の声をあげると自分に誓ったのでした。だのに食べて寝てうろつきまわっている。こんな風にはやっていけない……と彼は言いました。

わたしは彼の苦しみが理解でき、(エマ自身も出獄後拘禁状態の回想に苦しんだ経験をもっている——訳註)過去にとりつかれた愛する人のために心が血を流しました。わたし達は、一三番街東二一〇へ戻りました。そこでの生活へ復帰する闘いは、更に厳しさを増したのです。サーシャのよくない身体条件は、何かする仕事が見つけどせず、わたしを取巻く生活環境も彼には奇異で疎遠に思われたのです。週がたち、月を過すにつれ、彼の不幸は増しました。わたし達だけで部屋にいたとか、マックスが仲間だと少しは自由に息ができ、よく訪ねてくる若い同志、ベッキー・エデルソンと一緒に幸福そうでした。けれど他の友人達は、みな彼をいらだたせ悩めるのです。同席するのに耐えず、いつでも何か口実を作つて出かけるのでした。戻ってくるのは朝方です。彼の重い足どりをききつけ、着たままベッドに倒れこみ、安らぎのない眠りに落ち、刑務所での生活が恐ろしい悪夢になって悩める様子がわたしにはよく判りました。何度も悲鳴をあげ、それがわたしの血を恐怖で凍らせるのでした。幾夜もわたしは心の傷みで部屋を歩き廻り、サーシャの生活への復帰法をみつめようと思いました。

講演旅行がそれに適するかも知れないと考えた。彼の心に重くのしかかる——刑務所とそこでの蛮行——ものは自分ではねのけるでしょう。わたしの仕事だとみなしている講演旅行の仕事こそ生活へ復帰する助けになる筈です。それに以前の確信を取戻させるでしょう。わたしはサーシャに、幾つかの都

市に在るわが仲間の人達と接触するよう依頼しました。間もなく彼は講演の申込みを受けました。それが彼にすぐ変化をもたらしたのでした。落着きのなさや憂鬱が少くなり、わたしに逢いにくる友人達とも話ができるようになって、(大地)誌の一〇月号の準備に興味を示した。

その号はレオン・クゾルゴスについての論文を含み、五回忌を記念するものでした。サーシャとマックスは記念号を発行する考えに賛成だったが、他の同志達は、クゾルゴスについて何かするのは運動と共に雑誌を傷つけるとの立場によって反対しました。その人達は、物質的援助をやめると脅かしさえするのです。わたしは自分に(大地)誌を始めた時から、グループであれ、個人であれ、その方針を指示することは許さないと決めていました。だから反対がでたことで、わたしの計画通り、一〇月号は、クゾルゴスに宛てることに決心したのでした。

雑誌が出るとすぐ、サーシャは旅行に発った。最初の地はアルバニー、シラキューズ、ピッツバークでした。わたしは彼があんなに思ひ出の地へ帰るとの考えは好まなかった。特に、ペンシルヴェニアの減刑法の条項によると、サーシャは州当局の恩恵を八年間受けることになるのです。その期間中僅かな犯行でもいつでも彼を逮捕でき、刑務所へ送りかえして、例の二二年の刑を勤めさせ得るのでした。でもサーシャはピッツバーグへむかったのです。わたしは彼があんな都市で講演すれば、刑務所の悪夢から自由になれるのではないかと、僅かな希望にすがりつきました。電報がきて、ピッツバークの集会は成功だったとの由にほっとした。すべて旨くいったのです。

次ぎの予定はクレイヴランド。あの都市で最初の集会后、サーシャが泊った同志の家に戻っていないとの電報を受取った。あの人達が人と逢うのを厭っていたから、わたしは別に驚かなかった。多分わたしができるようにホテルへ出かけたのでしょう。それから夕方になると講演に出席するでしょう。

でも夜中に別の電報が入って、彼が集会にせず、同志達が案じているとのことでした。わたしも愕き、サーシャがその次に行く宛のデトロイトにいるカールへ電報しました。その日は、そして夜になって、も返事がなく、暗い不吉な予感がたずんだ。翌朝の新聞は、大見出しで、**最近釈放されたアレキサンダー・ベルクマン行方をくらます**と流しました。

このショックでわたしは動てんした。初め彼に何事が起きたのか思念が結ばれない。ようやく二つの考えにまとまったのです。―彼はピッツバーグ当局によつて誘拐されたか？もつとありそうなことで恐しいのは―自分の生を終ったかも知れないことでした。わたしは彼をピッツバーグへ行かせないよう訴えなかったのが口惜しかった。でも彼の危険性、恐ろしい想念が頭にこびりついていて、それは自殺です。サーシャが憂鬱の苦しみの中で、何度も言っていたのは、生きることは気にかけない、刑務所が自分を人生に適さない人間にしまったとのことでした。わたしの心は、彼を手に取戻しただけで、またわたしから追いたてたその残酷な力に対し、激しい抵抗を感じたのです。それにしても講演旅行の考えを打ちだしたのが悔まれました。

わたし達は三日三晩、ニューヨークに滞在して、各地の仲間達が警察署、病院、死体置場等、サーシャの身柄を捜したけれど、成果はなかった。クロボトキンや他のヨーロッパ在住のアナキストからも電報で問合わせがあり、わたしの部屋は人で一杯でした。わたしは不安で気狂いになりそうで、サーシャが最後の手段をとったのではないかと案じました。

わたしはエリザベス、ニュージャシーへと集会に出なければなりません。わたしの長い公生活の経験からして、自分の悲しみや歓びを市場で、のんびりした人びとの眼差しにさらしてはいけないうです。でもどうやって、今わたしの考えのすべてを押え隠し通せるでしょうか。数週間前の約束事であ

り、行かざるを得ません。マックスが付添って呉れるのです。彼はもう切符を買い、駅の入口まできました。突然わたしは、何か犯すような悲劇の予感にとらわれました。立ちどまって「マックス、マックス」と呼びました。へわたし、行けないわ。何かが部屋へ戻れとひきとめるのよ、彼は了解して呉れ、帰るように言います。いいとも自分がきみの欠席を詫び、代りに話してくると言います。わたしは彼の手を固く握り、ふりほどくとニューヨーク行きフェリーボートをつかまえようと走りまわりました。

第三大通り一三番街で、ベッキーの走ってくるのに出逢った。黄色い紙片を振っています。へあなたを探していたのよ、彼女が言う。へサーシャが生きていたの。一四番街の電報局で待っているそうだからわたしの心臓は口から飛びだしそうでした。彼女から紙片をひったくり「あとで来てよ」と呼びかけ、全速で一四番街へ走った。電報局へ着くと、サーシャがいました。彼は壁にもたれ、小さなバッグが足許にあった。

「サーシャ、あなた、とうとう逢えたのね」

わたしの声が何かぼんやり夢見心地の彼を呼び戻した。彼は唇を動かされたけれど黙っていました。その眼だけが彼の苦しみと絶望を語っていたのです。手をとって、しゃきつとさせようとしたけれど、彼の身体は熱があるかのように震えていました。わたし達は一三番街東二一〇の家近くまで来たのですが、彼が突然「へここじゃないんだ。ぼくはきみの部屋で誰かみるのは厭なんだ」と言う。わたしは一瞬どうしていいのかわかりません。タクシーを呼んで運転手にパークアウエニューホテルへやつてくれるよう頼みました。

夕食の時間でした。ロビーは沢山な客です。みな夜会服を着ている。会話と笑い声が食事の間の音

樂に交じって聞える。わたし達は部屋に残った。サーシヤは眼まいがして、ベットへ運びました。彼は崩れるように倒れた。わたしは電話をとり、ウィスキーと薄いスープを求めました。彼はそれを夢中で飲み、いくらか楽になった様子。三日間食わず、寝ていないとのことでした。風呂を用意して、衣服を脱がせにかけると、わたしの手は鋼製のものにふれました。彼は尻のポケットに拳銃を隠し持っていたのです。

風呂からあがって、熱いものを飲んだサーシヤはわたしに話しました。彼はニューヨークを発つと旅行が厭やになった。講演が近づくにつれて、パニックに襲われ、逃げだしたい気持ちになったのだそうです。集会は入りが悪く、活気もなかった。彼の泊った同志の家は、こんでいてひとりになれる別の部屋がなかったのです。その上更に悪いことに人が大勢で、質問攻めです。それでも講演旅行はつづけました。ピッツバークでは幾らか憂鬱から救われた。それは警官や刑事、それに刑務官が出席していたので、闘争心が湧き、我を忘れさせたのでした。でもクレイベランドでは到着の時から酷い経験でした。駅では誰にも逢えず、同志の家を探すのに精力をすりへらした。その夕方の集会は聴衆が少く、不活発でした。講演が終って、お客になる同志の農場まで長い道のりだった。疲れ果て、死ぬ程の苦しみで深い眠りに陥りました。夜中に眼覚め、見知らぬ人が自分の傍でいびきをかいている。長い刑務所での独りの生活は、近くに人が寄ると、苦痛になるのです。彼はその家を飛び出し、田舎道へでて、身を隠す場所を探しました。でも平和は訪れず、生活に不適應だとの感じから遁れられない。そこで終りにしようと思ひました。

朝になって、市街へ戻り、拳銃を買った。彼はバッファローへ行くことにしました。あすこなら、誰も知らない。彼が生きていようと死のうと彼だと判る人はいないのでした。昼も夜も市街を歩いた。

でもニューヨークが抗いがたい力をもっていました。とうとうニューヨークへ来て、二日二晩、一番街東二一〇の周辺を歩きまわりました。誰かに出逢うのが怖く、それでいて離れられないのです。ボウエリにある自分のむさくるしい部屋へ戻る度に、拳銃で最後の瞬間をやってみました。それから近くの公園へ行き、結末をつけることにしたのです。でも小さい子供達の遊んでいる光景が、彼に過去を想いださせ、ヘセラ服の少女（エマのこと——訳註）を想った。へだからぼくはきみにもう一度逢わないと死ねないんだ。彼はそう語りました。

彼の物語に息を呑み話の腰を折るのは、はばかられました。サーシヤの内面の闘いは、この三日間のわたしの苦しい不安と比較にならない程のものでした。すでに何度も死に、また生から遁れようとするこの人にむけ無限の優しさが、わたしの心をみだした。この不幸な友を追い廻す不吉な力を屈服させようとの熱い想いがわたしをとらえたのです。

わたしは彼に手を差出し、家に来るよう頼みました。ヘステラだけがいるのよ。それに誰もあなたの邪魔をさせないわ。わたしは訴えた。わたしの部屋には、ステラ、マックス、ベッキーがわたし達の帰りを待っていました。わたしはサーシヤを廊下に連れ出し、わたしの部屋に招き入れ、ベッドに寝かせた。彼は疲れた子供のようになりました。

* A・ベルクマンはこのあと徐々に回復し、運動でエマと協働した。国外追放では彼女と共にロシア革命を詳さに見て、ヘクロンシユタットの日記へ刑務所での回想へアナーキストコミュニティニスト等の著書を発表している。